



## 藍の種を蒔く

平成30年3月分

藍の種をお送りします。1アール分の量があります。

---

### 藍の種類

～ガイドブック P104 参照～

今回皆さんにお送りした種は千本<sup>せんぼん</sup>という種類です。もう1種は仙台のちぢみ葉又は紺葉という種類です。藍はタデ科の植物で一年草です。千本は生葉に適した種類です。薬<sup>すくも</sup>に適しているのは小上粉<sup>こじょうこ</sup>とか百貫<sup>ひやつかん</sup>です。白か薄いピンクの花が咲きます。それに比べて千本は濃いピンクや赤い花が咲きます。茎の色も赤味がかっています。他に大千本や椿葉、ちぢみ葉等もあります。ちぢみ葉は寒冷地で育てるのに向いています。また早く花が咲きますので、早く作りましょう。

一年草とは、春に植えてその年に種を取る草のことで毎年植付けをせねばなりません。

私の庭では毎年11月頃自然に種が落ちて、すぐに芽が出て、そのまま冬を越し、3月に大きくなり10年もそれをくり返していますから自生？と言えるかも知れません。畑では冬に霜のため消えてしまいます。

その他藍の種類には、キツネノマゴ科のリュウキュウアイ、アブラナ科のエゾタイセイ、トウダイグサ科の山藍、マメ科のインドアイ等世界でその土地に合った含藍植物から藍染めがなされています。

---

### 植える時期

徳島では3月の初めの大安の日に種を蒔くことになっています。温度差によって多少違います。霜が降りなくなる時期が良いと思います。北海道、東北等ですと5月になります。

---

## 苗 床

---

種が小さいので、土がかたい方が種が沈み込みません。前もって消石灰（農業用）をふり、土を耕し平らにします。

1アールの種の苗床は1m四方に植えます。多すぎるようでしたら、余った種は欲しいと言う方に分けてあげてください。来年に残してはいけません。もしよろしければフライパンで弱火で炒り、お汁に入れて食べることもできます。また、お茶に加えて煮だして飲んでも良いですよ。

---

## 種 蒔 き

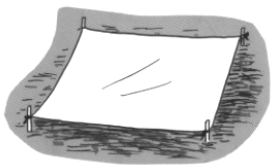
---



① 苗床にたっぷりの水を撒いておきます。

② 手の平からばらばらと一カ所に集まらないように蒔き、砂又は細かい土をうすくかけます。

**注) この上からじょうろで水をかけると種が流れますので、気をつけましょう。**



③ 雀が食べないように、濡れた新聞紙か網を張ります。2週間くらいで双葉が見えてきます。芽が出たら新聞紙（網）を取り除きます。

④ 草を取ったり、多過ぎた所を間引きます。

この間引いた新芽は、サラダにしたり、炒めて食べる  
ことができます。

---

## 定 植

---

植えてから1ヶ月半位経つと（暖地で4月の終わりから5月の初め頃）、約15～20cm近くになります。このころに定植をします。寒い所ではビニールハウスに植えると早く植えられます。



畑に堆肥・石灰等を散布してよく耕し、60～80cm間隔に鍬で溝を掘ります。苗床に水をかけて根が痛まないようにして、苗を抜き、畑に運びます。



一株4～5本ずつ40cm間隔に溝の中に置き、土をかけてかかとで踏みつけます。このとき気をつけることは、平地に溝を掘るので、うねを高くしないことです。この場合苗は片方に倒れていますが、自然にまっすぐになってきます。



2週間程して、両側から土をかけてやります。どんどん大きくなるとまた土をかけてうねを高くしていきます。いろいろな田の草が生えますので、草取りは丁寧にしましょう。

---

## 管 理

---

『たで喰う虫も…』ということわざがある通り、アブラムシやゾウ虫、根切り虫等、いろいろ虫がつきます。少量の場合は手で取り除くこともできますが、オルトランやダイジストン等を10日位してからほどこします。根にかからないよう注意して少し離れたところに置きます。

私は、無農薬を通そうと消毒をしないでいたところ、ザワザワと音がするほど根切り虫に喰べられ、一夜のうちに茎だけになった思い出があります。

梅雨の時期は水がたっぷりあるのですが、日焼けの時期には水をかける場合があります。約4ヶ月間、収穫までに化成肥料を2～3回ほどこします。害虫駆除も2～3回行います。無農薬をとおっしゃるなら、昔は油粕や魚粉を使っていたそうです。消毒にはニガキという植物の液を与えたそうです。

---

## 藍 刈 り

---



6月下旬～7月上旬頃（3月初め～中頃に種蒔きした場合）には60cm程になっています。梅雨明けの晴天の日に刈ります。藍の葉を乾燥させて使用する場合は朝露が切れてから刈るのですが、生葉染めの場合は朝露のある間に刈ります。土地から15cm程残して刈り取るようにしましょう。

この件については、毎月利用目的によって説明します。なお、暖地では2回、3回と刈り取ることができますので、管理に気をつけて大切に育てましょう。